

かき混ぜ規則は不要である

高 橋 直 彦

0. 摘 要

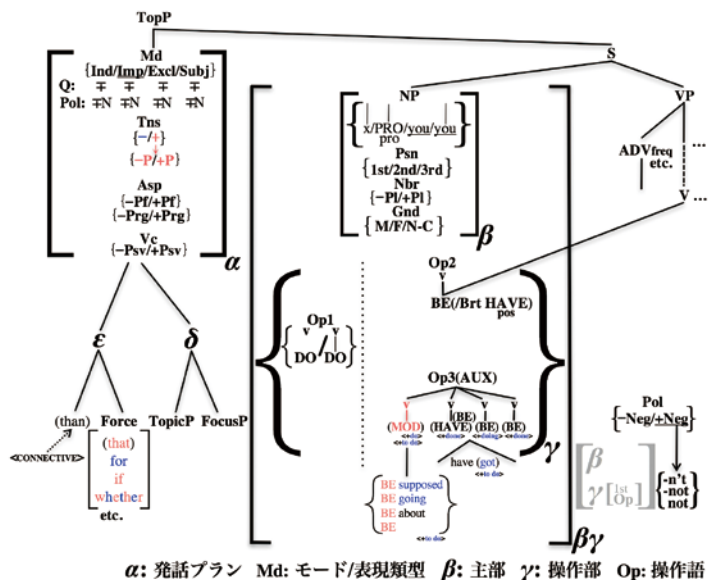
筆者は1988年よりひな形方式という枠組で言語研究を遂行してきている。枠組の眼目は「文法内規則（≡共時態）のレベルで書き換え操作を禁ずる」というものであり、この大前提の下でこれまでに（日本語・英語）形態音韻論（高橋（1995），高橋（2005），他），（英語）音声学（佐藤（2012），他），（英語）統語論（佐藤・小林（2013），藤田（2015），佐々木（2016），他）といった領域での検証を枠組賛同者と共に行ってきた。本論考はひな形方式の（日本語）統語論に対する適用例と位置付けられるもので、「書き換え規則禁止」という概念に対する抵抗感が比較的大きいと予想される日本語のかき混ぜ現象を取上げて採り上げ、この現象に対する書き換え規則不要論を展開するものである。⁽¹⁾ 本論考の骨子は「語順の見かけ上の変更（という現象）に対して書き換え操作（という理論上の道具立て）を想定するのは誤謬である」という一点に尽きる。

なお、日本語の語順というトピックは（基本語順ひとつ採っても）極めて大きなトピックであり、本論考で採り上げる現象は語順に関わるとく断片的な記述（いわゆる「かき混ぜ」絡みの記述の原理）であるという点をお断りしておく。また、日本語の文のひな形に関し「全体像」を提示するという点もここではしない。あくまで全体像提示までの一階梯と理解されたい。理由は、筆者自身理論的に不確定な部分が依然あるということもあるが、もっと大きな理由は、次頁（1）に示すようにひな形方式の奉ずる理論的前提が先行研究（の大半）の前提とあまりに乖離しているために、現段階で中途半端な提示の仕方をする（紙幅の関係もあって）理論上の誤解を種々惹起する可能性が高くなる、という懸念があるためである。ただ、論の展開上（1）の諸想定事項に（疎密の度合いはともかく）言及する必要は当然出てくる。なお、（2）に英語の文/節のひな形を、（3）に英語名詞句のひな形を提示しておく。

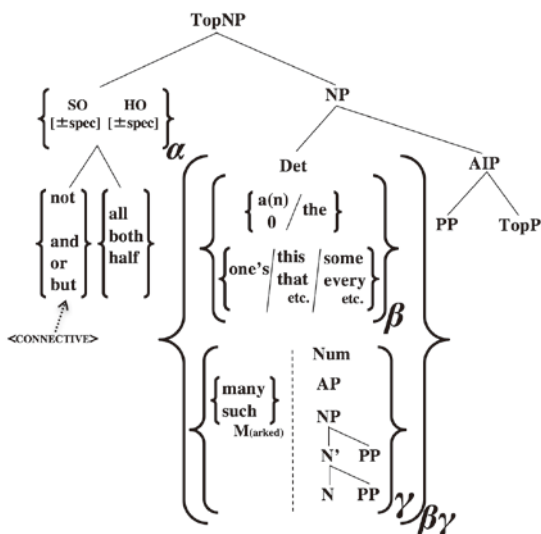
⁽¹⁾ ここでは便宜上「（日本語）統語論」という言い方をしたものの、実はかき混ぜ現象は通常「（広義の）文体規則」と呼ばれる操作で説明されるものとされる。さらに言うなら、この操作はこれまで、(i)「理論上統語操作の一種に他ならない」と見做す立場と、(ii)「談話文法や語用論といった、純粋な文法の外側に位置付けられるようなレベルにおける操作として説明されるべき現象である」と見る立場とが競合してきた。本論考では、二つの立場を瞥見する。また、中島（1995）は、(i)、(ii)の「棲み分け」を想定している。

- (1) a. 「移動規則」を始めとする「書き換え操作」(含削除・挿入)を文法内規則(≒共時態)レベルでは一切想定しない。「数量詞遊離」と呼ばれる「移動現象」も「移動規則」で説明されるわけではない(cf. (18), (20'a))。
- b. 「形式と(コアの)意味は対一対応が原則である」と想定する(真壁(2012))。また、「形式が先か意味が先か」という難問に対しては少なくとも統語部門中心主義(syntactocentricism)は採らない(Culicover and Jackendoff (2005))。(ただし、「究極的には意味が先」(真壁(2012: 13-14))とは答える。)
- c. 「併合(Merge)」という操作(Chomsky (1995))に基づくボトムアップの文構築原理を想定しない。文構築は、ひな形の側から見れば(文を超えたレベル——談話文法や語用論——も含めた)言わばトップダウンであり、語彙項目の側から見れば言わばボトムアップではあるが、ひな形方式ではそのような意味での方向性を云々すること自体そもそも有意なものとは考えない。(2)に挙げた英語のひな形を援用して述べるなら次のようになる。即ち、「 α =発話プラン」が「部門内外の関係全体を規定する職能を持ち」、かつ、「語彙項目」が「当該発話プランに合致する形でしかるべき位置に始めから(=書き換え操作による紆余曲折を経ずに)配置される」と想定する、ということになる。
- d. 「Tripartite Parallel Architecture」(Jackendoff (1997))は文法の諸部門間にインプット→アウトプットの関係想定しないものの、部門内(例えば統語部門内)に想定するか否かに関しては中立的である(言質を与えていない)。ひな形方式では部門内にもかかる関係を想定しない。つまり、インプット→アウトプットの間を部門内にも部門間にも想定すること自体否定する立場である。その意味でひな形方式は「TPA」よりも理論的にさらに制約された枠組である。
- e. 範疇文法も書き換え操作を想定しない枠組とされるものの、私見では、範疇文法は解析(parsing)という側面(形式あり→意味を求む、という方向)には威力を発揮するものの、産出という側面(意味あり→形式を求む、という方向)に対する説明力に関しては未知数である。ひな形方式は解析・産出双方の側面に関して中立的な枠組である。
- f. 「2項枝分かれ」を絶対原則としない。帰無仮説とする。
- g. NPに関するいわゆる「DP仮説」(Abney (1987))を想定しない。
- h. 日本語に「主語」という概念は不要と見る。
- i. 「動詞句内主語仮説」(Kitagawa (1986), cf. (19))を想定しない。

(2)



(3)



1. データと理論的解釈

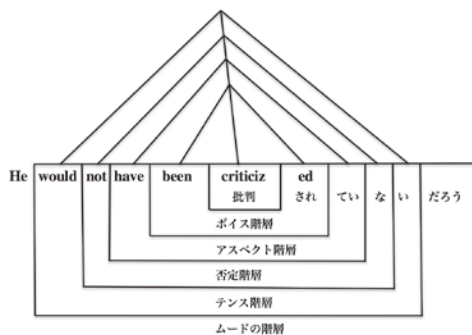
以下本節では、被説明項であるデータと説明項である理論的解釈とに関して (4) の各段階に分けて議論を展開することにする。また、説明の便宜上適宜英語との比較を行ってゆく。

- (4) a. 日英の構造が（鏡像関係をなす点を除けば）「共通」であると主張されるデータを吟味検討し、両者には根本的な相違もあることを指摘する。
- b. 移動規則を始めとする書き換え規則の存在が（言わば堂々と）前提されているデータを吟味検討し、移動規則という道具立ては理論上不要でありかつ有害でさえあることを、まずは英語に関して主張する。
- c. 移動規則を始めとする書き換え規則の存在が（bほどではないものの当たり前のよう）に前提されているデータを吟味検討し、この場合も移動規則は不要であり有害であることを、まずは英語に関して主張する。
- d. 移動規則の存在が（それ以外の手立てがそもそもあり得ないであろう、といった暗黙の前提の下）前提されている日本語のデータ（＝「かき混ぜ」）を吟味検討し、この場合もやはり移動規則は不要であり有害であることを主張する。

1.1. 日英の共通項と相違点 (cf. (4a))

まずは(4a)から見てゆく。遠藤(2014: 26-27)は、以下の図(5a)を示し、(鏡像関係をなしている点を除いて)日英の構造が「共通項」を示す、という点を(5b)のような形で指摘している。

- (5) a.



- b. ここでは、日本語と英語において、同じように動詞からはじめて、同じタイプの要素を1つ1つ併合して、同じ階層を作ることによって文が作られることが示されている（日本語学では、階層を箱で表すことがあり、生成文法では、階層を木の構造で表す。ここでは、日本語学の表記法を文の下に示し、生成文法の表記法を文の上を示して、並記することで、両者が階層構造について、同じ考えを共有している点）が示されている） [...]

しかし、この主張には首肯できない点が幾つかある。第1点。「動詞からはじめて、同じタイプの要素を1つ1つ併合して」という言い方には、併合 (cf. (1c)) という概念と2項枝分かれ (cf. (1f)) という概念とが前提とされている。しかし、両概念とも実は妥当性を欠くものである。まず併合という概念であるが、(1c) に略述したように、生成文法主流派は併合というボトムアップの文構築装置を想定してしまったがために、(文の種類によって) 変換という (本来不要な) 装置が必要となってしまっている。この点に関しては後ほど立ち帰ることにして、この概念と連動する2項枝分かれをここではまず検討しよう。以下の例を参照されたい。

- (6) a. 1, 2, 3, 4, 5, 6 and 7
 b. Sunday, Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday and Saturday

(6a, b) では、「,」や「and」で要素が次々に連結されているが、連結された表現全体の構造及び範疇はどうなっているのだろうか。

まずは構造から。分かりやすく (6a) の例「1, 2, 3, 4, 5, 6 and 7」で考える。(6a) を「併合 + 2項枝分かれ」で初頭から分析するなら以下ようになる。「[[[[[[[1, 2], 3], 4], 5], 6] and 7]」。また、末尾から分析するなら以下ようになる。「[[[1, [2, [3, [4, [5, [6 and 7]]]]]]]」。いずれにせよ、こうした構造は果たして直感を正しく捉えているであろうか。「否」であることは、(6b) の例を同様に分析した「[[[[[[[Sunday, Monday], Tuesday], Wednesday], Thursday], Friday] and Saturday]」ないし「[[[Sunday, [Monday, [Tuesday, [Wednesday, [Thursday, [Friday and Saturday]]]]]]]」の異様さから明白であろう。次に、範疇に関してはどうか。一般に等位接続詞によって結ばれる要素は同一範疇に属するとされる。しかし、この原則は実は規定が厳格過ぎる。無標の場合は確かに形式上「同一範疇」に属すると言ってよいものの、実際にはもう少し緩やかな形で意味に基づいて規定さるべき原則である (cf. (1b))。「It's a breeze and easy.」等の表現を参照されたい。(因みに、通常「It's a breeze and easy.」の語順であって、「It's easy and a breeze.」の語順でないのは、リズム上の要請であろう。)

さて、では (6) はどのように分析すべきであろうか。ひな形方式の用意する解答は以下の通りである。まず、「名詞句のひな形」を藤田 (2015) を改定した佐々木 (2016) に従って上述の (3) ように想定する。「DP 仮説」(1g) は想定しない。「a」から左に枝分かれしたスロットは「and」等が随意的に入るスロットで「Connective」と呼ぶ。ここは要素が空であってもよい。(因みに、(6) の「,」と「and」とは相補分布をなす機能上同類の要素であり、「,」は上昇イントネーションで発音される要素を綴ったものである。なお、(6) の末尾要素直前

は発音上「上昇イントネーション+and」ないしは「andのみ」で発音される。興味深いのは、方言差や嗜好の違いにより綴り字上も「, and」と「and」とが並存している点である。——ただし、発音上の違いと綴り上の違いとが必ずしも1対1に対応する訳ではない。) ひな形方式では、(6)の「,」や「and」で連結された表現は(3)の「TopNP」が任意の個数(ここでは7個)連続したものと見做される。初頭の「TopNP」のみ「Connective」の要素が空である。因みに、(6)の7個の連続全体を括る範疇は敢えて設定しない。理由は、上述のように、全体を括る範疇を形式的に定義することは厳格過ぎるからである。全体は共通の意味を下に緩やかに結ばれるのみである。

ところで、(3)に関して「名詞句の初頭に随意要素とは言え「Connective」のような要素を想定するのは直感に反するのではないか」という反応が予想される。ある意味当然の反応ではあるが、この点に関するひな形方式の側からの解答は次のようになる。まず第一に、「Connective」のような機能上の要素を想定するのは、実は名詞句に限ったことではない。(2)に見る文節のレベルでも「ε」から左に枝分かれしたスロットは「than」等が随意的に入るスロットでやはり「Connective」と呼ぶ。²⁾ 従来の統語論はこうした要素を文の「外側に」追いやり継子扱いした結果、把捉さるべき一般化が把捉されない結果となってしまっている、というのがひな形方式の側の主張である。第二に、名詞句の場合に話を戻すと、「Connective」に類する要素を想定しない従来の理論は逆に困った事態に直面することになる。再度(6)を見よう。上で、(6a)を「併合+2項枝分かれ」で分析するなら「[[[[[[[1, 2], 3], 4], 5], 6] and 7]」または「[[1, [2, [3, [4, [5, [6 and 7]]]]]]」となる、と述べた。しかし、この言い方は実は厳密ではない。「2項枝分かれ」を厳密に適用するなら、(6a)は「[[[[[[[[[1, 2], 3], 4], 5], 6] and 7]」または「[[1, [2, [3, [4, [5, [6 [and 7]]]]]]]]」となる筈である。ここで、前者は「[...and]」、後者は「[and...]」という構成素を含んでしまう、という点に気づかれない。いずれの場合であれ、「2項枝分かれ」を厳守する枠組はこうした事態をどのように説明するのであろうか。

(4a)の問題に戻ろう。第2の問題点。(5)絡みの問題の第2点は(1h)に関わる点である。英語の「he」に対応する日本語は仮に「ハ格」で表されれば「トピック」であり、英語の「主

²⁾ 佐々木(2016: 14)からの引用を以下に示す。

ちなみに、「Yes, it is.」や「So, where were we in the last session?」や「Not only does he play the piano, but he also writes music.」といった文や節で見られる「yes」「so」「well」や「not only...but...」も文や節レベルの「接続要素」とみなし、こういった要素も「文節のひな形」[...]の「発話プラン」(α)直下の「ε」の(便宜上thanで示した)位置に入ると想定する。(「not only」に関しては同時にFocusPにも連結されていると想定する。)ただし、同じ「接続要素」でも、「yes」「so」「well」等は機能的に「言語外要素との関わり」を示す「語用論要素」としての性格を持つのに対し、「not only...but...」等は機能的に「言語内要素間の関わり」を示す「談話要素」としての性格を持つ。

語」とはそもそも異質の文法概念である。⁽³⁾ 仮に「ガ格」で表されてもやはり「主語」ではなく、(佐藤・小林 (2013) の言う)「有標表示要素」である。さらに、英語の「he」は文成立のための必須要素でありかつ「Operator (操作語)」(cf. 佐藤・小林 (2013))との一致が義務的となる(「would」の場合はたまたま一致現象が表面化しないが)のに対して、日本語では必須要素でもないし、動詞句内の要素との一致現象も見られない。かつ、いわゆる「主語」が生起しない場合も、ひな形方式では「省略」されたのではなくそもそも文法上「ない」と見做すことになる(近藤・姫野 (2012) の「日本語の主観的事態把握」に対する藤田 (2015: 12, 21) の強い解釈参照)。

(5) 絡みの問題の第3点。遠藤は、日英共に「動詞からはじめて、同じタイプの要素を1つ1つ併合して、同じ階層を作ることで文が作られる」としているが、この点に関して現実には日英間に相違が見られる。即ち、英語では「he」と「would」(テンスの階層)との間の相対的語順が、当該文が肯定文である(He would...)か、疑問文/仮定法の文である(Would he...?)か、否定疑問文である(Wouldn't he...?/Would he not...?)かで異なり得るのに対して、日本語の「彼/あいつ」(等)と「い」(テンスの階層)との間にはこうした相対性は見られない。⁽⁴⁾

第4点。遠藤は、「would」/「い」(テンスの階層)としつつも「だろう」(ムードの階層)に相当する英語表現を示していない。つまり、この点で日英の「共通項」関係は崩れた形に

⁽³⁾ (5a)では遠藤は日本語の「主語」をたまたま明示していないが、遠藤(2014)の枠組では「主語」という概念が想定されている。しかし、「主語」の概念規定が厳密さを欠いていて、実質「主題」の意味で用いられていたりする箇所もある。例えば §3.10では「主語」も「目的語」も「主語/トピックの階層」を占め得る旨が述べてあるが、この「主語の階層」は実質「主題の階層」のことである。また、「太郎は本を買った」(p. 34)の最初の「は」は「トピックの階層」、2番目の「は」は「フォーカスの階層」を占める旨が述べられているが、第1点として、これでは「トピックの階層」と上述の「主語の階層」との関係が不明である。第2点として、「太郎は」も「本は」もともに「主題」であり、かつ「本は」にはそれに加えて対比の卓立が音声上置かれているという形の説明(ひな形方式ではこの立場を採る。その証拠に、ここで「本は」に対比の卓立が置かれたいと容認可能性が著しく下がる)も可能であるが、このことに関する言及がない。(ついでながら、誤解のないように敢えて付言すると、ひな形方式でも「トピックの階層」に加え「フォーカスの階層」も認めている。)因みに、対比の卓立が音声上置かれる場合というのは、なにも「～は」に限らない。「～を」でも「～に」でも「～から」でも、あるいは形容詞句でも動詞句でも副詞句でも可能であるという点にも留意されたい。

⁽⁴⁾ 遠藤氏はおそらく、「いや、日英語のこの種の相対的語順の相違は変換規則適用の有無によるのだ」と反論されることと推察される。しかしながら、「変換規則」という道具立て自体がそもそも理論的に不要である(ひな形方式では、疑問文/仮定法の文/否定疑問文といった有標の文の場合「would」(Op3)を拾ってから主語「he」を拾うことにより表面的な語順が説明されると考える)し、一步譲って仮に英語に「変換規則」を想定したとしても、翻って日本語では「彼/あいつ」(等)と「い」との間に相対的語順がそもそも認められない。つまり、日本語の「批判/され/ていな/い/だろう」は「絶対的語順」のみを示し、かつ「/」で示す各要素間に「彼/あいつ」(等)の介在を許さないのである。また例えば、「批判されていないだろうよ、あいつは」のような語順を取った場合に関して言うなら、ひな形方式では「あいつは批判されていないだろうよ」→「批判されていないだろうよ、あいつは」というように移動を含む派生とは考えずに、「批判されていないだろうよ」と「あいつは」とは別個の文/発語が(後知恵により)2つ連続したものと分析されることになる。このことは、「批判されていないだろう、あいつは」よりも「批判されていないだろうよ、あいつは」と「よ」という評価ムード要素が入った場合の方が座りのいい発話になる、という点からも窮知される。

なっているのである。これに対して、ひな形方式では次のように考える。即ち、「would」がテンスを示すのに加え、当該文自体が(2)の「発話プラン α 」内の「Md: モード/表現類型」として「Subj (unctive): 叙想法」を選択している、と想定することになる。

以上本節では、(4a)の点、即ち、日英の構造が⁵(鏡像関係をなす点を除けば)「共通」であると主張されるデータを吟味検討し、両者には根本的な相違もあることを指摘した。

1.2. 移動規則は必要か(1) (cf. (4b))

本節では(4b)の問題点を考察する。即ち、移動規則を始めとする書き換え規則の存在が(言わば堂々と)前提されているデータを吟味検討し、移動規則という道具立ては理論上不要でありかつ有害でさえあることを、まずは英語に関して主張する。

(7)-(9)を参照されたい。

(7) A: What time did you get up?

B: I got up at six./At six./!I got up.

(8) A: What happened to John?

B: He was hit by Tom./!Tom hit him.

(9) A: Is this seat taken?

B: No. Go ahead and take it.

(7)から見よう。周知のように、英語では文レベルを超えた情報のやり取りに関して「文末焦点の原則(Principle of End Focus)」が適用される。(7B)でI got up at six./At six. が自然に聞こえるのは、(純粋な文構造のレベルでは必須でないと見做されかねない)「at six」の部分を情報構造上は重要な部分(新情報)としてこの原則通り文末に配置しているからである。因みに、「!I got up.」がこの文脈で不自然に聞こえるのは、(純粋な文構造のレベルでなら完結している筈のこの文が)聞き手であるAに情報構造上重要な情報(新情報)を提供していないからである。(場合によってAは「I know!」と怒り出すかもしれない。)

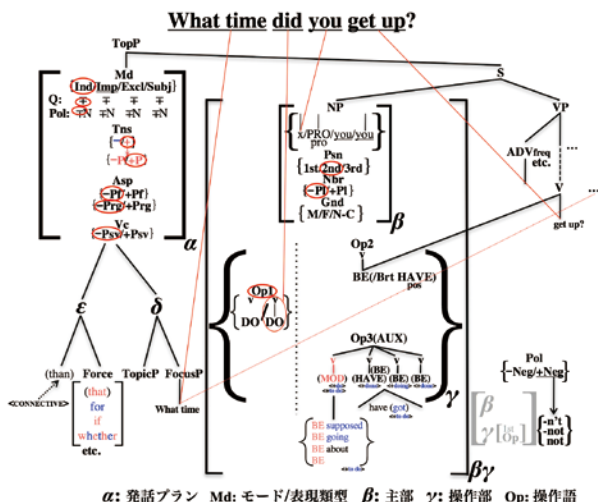
(8)の場合も基本的に同様である。「What happened to John?」と訊いているということは、Aは少なくとも「John」に「何かがあった」ということは了解の上で「具体的に何があったか」を知りたいということを知り手Bに伝えようとしているということである。であれば、Bは文末焦点の原則に則り、その「具体的に何があったか」の部分に当たる新情報「was hit by Tom」を文末に配置し、文頭には旧情報の「he」を配置してやればよい訳である(もはや旧

情報であるからこそ「John」ではなく「he」としている)。因みに、「!Tom hit him.」がこの文脈で不自然に聞こえるのは、(純粋な文構造のレベルでなら OK の筈のこの文が) 聞き手である A に文末焦点の原則に沿わない形で情報を提供しており、文頭に唐突に新情報が出てくるからである。

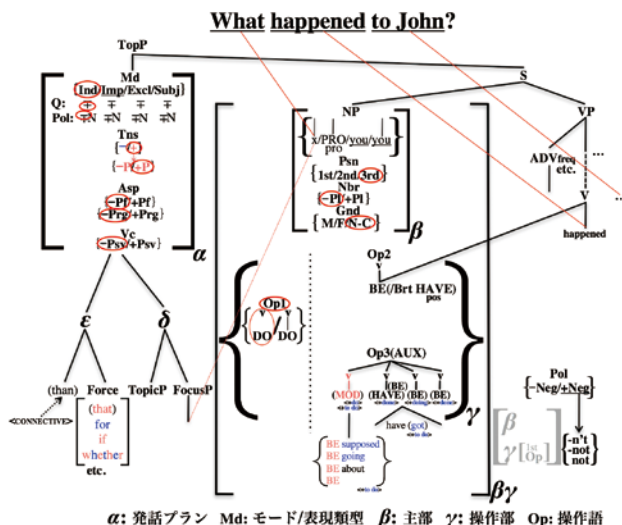
ところで、この文末焦点の原則とは別種の配置原則もある。いわゆる Wh 疑問文で典型的に観察される「最も知りたい情報をまず文頭に配置して相手に情報を求める」という情報配置法である。これが、(7A), (8A) に見る語順である。この Wh 疑問文に見られる語順は、文末焦点の原則の場合とは異なり、(問い返し疑問文の場合を除き) 義務的である。つまり、文末焦点の原則はあくまで「原則」であり、仮に違反したとしても「不自然な文」が帰結するに過ぎないが、Wh 疑問文の場合は義務的な「規則」であるが故にこれに違反すると(間接疑問文の場合——方言差は捨象する——を除き)「非文法的な文」が帰結することになる。

さて、この「義務的な規則」をどう把捉するかであるが、これが本節の主題となる。生成文法主流派に代表される先行研究は、これを「移動規則」として捉える((7A)では「Wh 要素の前置+DO 挿入」, (8A)では「Wh 要素の前置」)。つまりは、(4b)で指摘したように「移動規則」の存在が(言わば堂々と)前提されているのである。これに対して、「移動規則」を始めとする「書き換え操作」(含削除・挿入)を文法内規則(≒共時態)レベルで一切想定しないひな形方式((1a))では以下のように考える。

(10) a. ((7A)のケース)



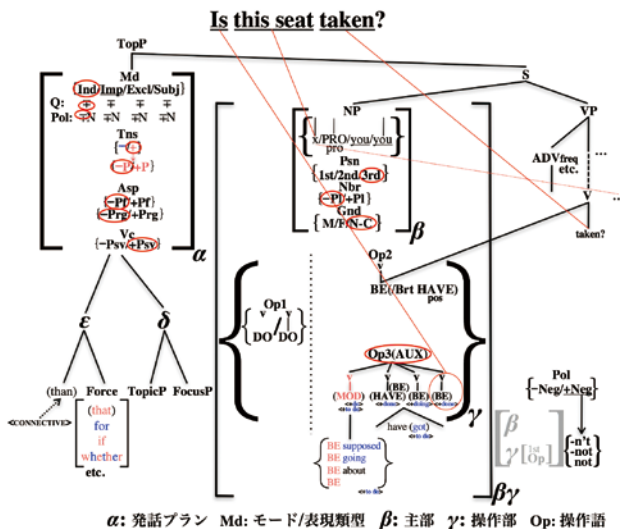
b. ((8A) のケース)



要点のみ示す（詳細は佐藤・小林 (2013), 高橋 (2016) 参照)。(10a) では、「What time」が「FocusP」に始めから配置される。「発話プラン α」の「Md: モード/表現類型」が「Ind (icative) 叙実法」の「Q (uestion)」という有標のケースであり、「get」という一般動詞を使っている文であるので、「Op (erator) 1 (操作語 1)」の右側の連結線有りの方が選択され（「did」と発音され）、かつ下から拾う（「Op1 → 主語」つまり「did you」と拾う）。以上である。ここには「Wh 要素の前置」という「移動規則」も「DO 挿入」という「挿入規則」も想定されていない、つまり「書き換え操作」が一切想定されていない、という点に特に注目されたい。(10b) も基本的に同じように分析される。

(9) の場合も同様である。(11) を参照されたい。

(11)



(9A)の「受動文」に関しては、詳細は高橋(2016)を参照されたいが、ここでは生成文法主流派に代表される「書き換え操作」に基づく説明がいかに直感に反するかという点だけ指摘しておく。(9A)のような文が発話される典型例を想像してみよう。映画館や劇場で予約席ではない一般席が空いているかどうかをたまたま当の席の隣に座っている人物に尋ねる、というような場面が想定できる。このような場合、脳内で無意識にもせよ「__ is taken this seat」→「あつ、このままだと「this seat」は格がもらえないな。じゃあ、格がもらえる主語位置に移動しよう」→「This seat is taken」→「あつ、そもそも自分はこの席が空いているかどうか、この人に訊きたかったんだ。じゃあ、疑問文にしよう」→「Is this seat is taken?」... などというようなことを本当にやっているであろうか。いかがであろう。言わば、生成文法主流派はこのようなことを大真面目で想定しているのである。現実にはこんなことを脳内でやっている暇があったら、さっさと別の空いた席を探しに自分が「移動している」に違いない。ここで、次のようなお定まりの反論がすぐにも聞こえてきそうである。「いや、そうではない。こうした操作が実際に脳内で行われている操作であると主張している訳ではない。そうではなく、あくまでも理想化された話者の脳内の抽象化された文法操作というレベルでの主張をしているのであって、これを現実の操作として捉えてしまうのは言語運用のレベルと混同しているのだ」。これに対しては3点だけ指摘しておこう。第1点。ここで「言語運用」云々という概念を持ち出すのは筋違いである。「純粋な言語能力」に影響を与える言語外諸要因をも勘案したレベルを「言語運用」と呼ぶ場合、言語外諸要因には「記憶の限界」とか

「集中力の欠如」とか「肉体的・精神的疲労」とか種々様々の要因が含まれることになる。そのことは決して否定しない。しかし、上で想定した脳内シミュレーションは、基本的に生成文法主流派が想定している「純粋な言語能力」レベルの操作を分かりやすく、話し言葉で噛み砕いて述べただけである。因みに、ひな形方式では純粋な文レベルの他に、いわゆる談話文法や語用論のレベルも始めから射程に入れて考えるが、(談話文法や、語用論と文文法との間の妥当な線引きをどの辺りで適正に行うかという問題は大きな課題として残っているものの)談話文法や語用論を言語運用と一視同仁するのは論外である。第2点。ひな形方式という「変更操作を純理論的に排除する枠組」が代案として既に提示されている以上、それでも「変更操作に純理論的に固執する枠組」でなければならぬ道理を説明せねばならぬ筈である。その際、主流派であり長い伝統があるといった理由は、理由にはなっても根拠にはならない。第3点。少なくとも上の文脈での「taken」は形容詞化された状態を表すと解釈され、この意味でも受動化は怪しい。

以上本節では(4b)の問題点を考察した。即ち、移動規則を始めとする書き換え規則の存在が(言わば堂々と)前提されているデータを吟味検討し、移動規則という道具立ては理論上不要でありかつ有害でさえあることを、まずは英語に関して主張した。

1.3. 移動規則は必要か(2)(cf.(4c))

本節では(4c)の問題点を考察する。即ち、移動規則を始めとする書き換え規則の存在が((4b)ほどではないものの当たり前のように)前提されているデータを吟味検討し、この場合も移動規則は不要であり有害であることを、まずは英語に関して主張する。本節で考察するのは、前節の「Wh 疑問文」の場合のような「義務的操作」ではなく、もう少し義務性の低いいわゆる「文体規則」と呼ばれる操作である。

(12), (13)を参照されたい。これは O'Grady, *et al* (1996³)より引用したものであり、いずれもいわゆる文体規則が適用されたものである。

- (12) Underlying the creative aspect of language is an intricate mental system that defines the boundaries within which innovation can take place.
- (13) Nowhere is the ability to deal with novel utterances more obvious than in the production and comprehension of sentences.

まず、(12)から考察しよう。この文の文体規則適用「以前」の文(らしきもの)は「一応」以下のようになる。

- (12) a. An intricate mental system that defines the boundaries within which innovation can take place is underlying the creative aspect of language.

(12) では (12a) の「underlying the creative aspect of language」が文頭に前置され、それに伴って「is」と主語の「An intricate mental system that defines the boundaries within which innovation can take place」との間で倒置が起きている。問題は、(12a) の語順の文がなぜ (12) のような語順になっているかである。この間に対する解答はこの文だけをいくら眺めていても得られない。なぜなら、この文の語順変更の引き金となっているのは、「情報構造」に代表される「文脈情報」だからである。換言するなら、(12) がこのような語順であるのは、(Wh 疑問文に代表されるような) 文レベルの「義務規則」のゆえではなく文脈を考慮した「文体規則」のゆえ、ということになる。

そこで、(12) の語順の因子となっている当の文脈を簡単に見ておこう。この文 (12) は O'Grady, *et al* の第 1 章第 1 節第 3 パラグラフ第 1 文である。直前の第 2 パラグラフの内容は概略次の通りである。「人間の考えることや経験することは多岐に渡る。それを表現する言語というものには大きな要請が課され、新しい考えやら経験やら状況やらに呼応して新たな表現を許容してくれる「創造的な性質をもったもの」でなければならない。」これに直続する第 3 パラグラフ第 1 文として登場するのがこの (12) である。つまり、ここでの文脈構造と (12) で著者が言いたいことはこうである。

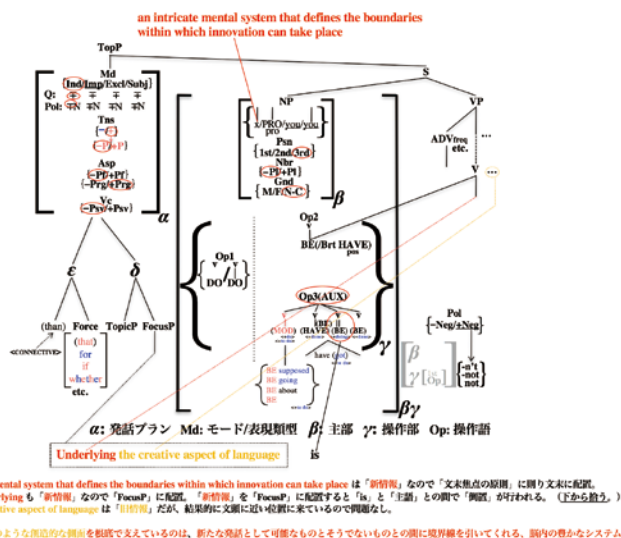
- (12) a. 言語のもつ「創造的な側面」については既に直前のパラグラフで述べた。つまり、「旧情報」である。ここでは、この「旧情報」に「新情報」を 2 つ追加したい。1 つは、この「旧情報」たる「言語の創造的側面」の「根底に、それを支えているものがある」ということ、もう 1 つは、その根底で支えているものが「新たな発話として可能なものとそうでないものとの間に境界線を引いてくれる、脳内の豊かなシステムである」ということ。

このような「文脈情報」があるために、(12a) は (12) のような語順になったのである。(12) に見る語順には文脈を背負ったある種の必然性がある、と言い換えてもよい。

以上を前提として (12a) から (12) を導出するには選択肢が 2 つある。生成文法主流派張り「書き換え操作」を前提とする方式と「書き換え操作」に依拠しないひな形方式である。「文脈情報」が「文構築」に先行する ((12a')) ののである以上、前者が不合理であるのは明らかである。ここでは、ひな形方式の方を示す。とりわけ、(12a') の第 1 の新情報提示を実現す

るのに、「FocusP」に「Underlying...」を始めから (=書き換え操作による冗余曲折を経ずに) 配置し (cf. (1c)), (12a') の第2の新情報提示を実現するのに、文末に焦点たる主語「an intricate... place」を始めから (=書き換え操作による冗余曲折を経ずに) 配置して (cf. (1c)) 「文末焦点の原則」を遵守している様子を読み取られたい。

(12) a'.



次に、(13) を考察しよう。この文の文体規則適用「以前」の文(らしきもの)は「一応」以下のようになる。

(13) a. The ability to deal with novel utterances is more obvious nowhere than in the production and comprehension of sentences.

(13) では (13a) の「nowhere」が文頭に前置され、それに伴って「is」と主語の「The ability to deal with novel utterances」との間で倒置が起きている。問題は、(13a) の語順の文がなぜ (13) のような語順になっているかである。この間に対する解答は、(12) の場合同様、この文だけをいくら眺めていても得られない。なぜなら、この文の語順変更の引き金となっているのは、「情報構造」に代表される「文脈情報」だからである。換言するなら、(13) がこのような語順であるのは、(Wh 疑問文に代表されるような) 文レベルの「義務規則」のゆえではなく文脈を考慮した「文体規則」のゆえ、ということになる。

そこで、(13) の語順の因子となっている当の文脈を簡単に見ておこう。この文 (13) は

O'Grady, *et al* の第 1 章第 1 節第 7 パラグラフ第 1 文である。直前の第 6 パラグラフの内容は概略次の通りである。「創造的なシステムは言語のあらゆる側面で観察される。例えば「可能な単語を構成する音の連鎖 (eg. *prasp* vs. **psapr*)」⁽⁵⁾ といった側面にも観察されるし、「特定の接尾辞を添加することで新たな単語を形成する操作 (eg. 仮定上の単語 *soleme* (N) → *solemic* (A) → *solemicize* (V) → *solemicization* (N))」といった側面にも観察される。」これに直続する第 7 パラグラフ第 1 文として登場するのがこの (13) である。つまり、ここでの文脈構造と (13) で著者が言いたいことはこうである。

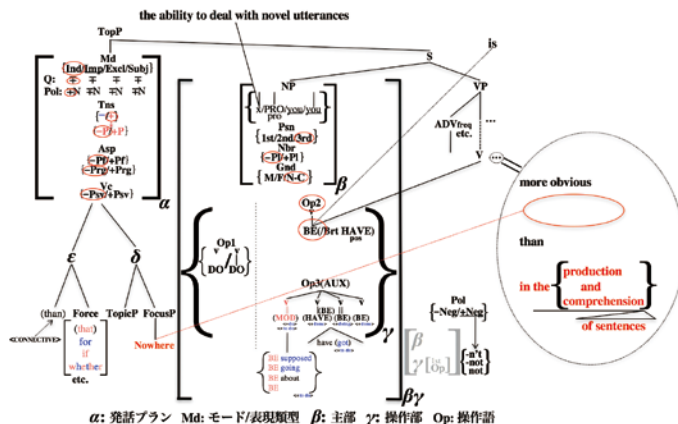
- (13) a'. 「新たな発話を処理する能力」については（文以外のレベルに関して）既に直前のパラグラフで述べた。つまり、「旧情報」である。ここでは、この「旧情報」に「新情報」を 2 つ（究極的には 1 つ）追加したい。1 つは、この「旧情報」たる「新たな発話を処理する能力」が「何と言っても文を産出したり理解したりするレベルで最も顕著に発揮される」ということ、もう 1 つは、この点で文レベルを超えるレベルは（単語を構成する）音のレベルでも単語レベルでも「どこを探してもない」ということ。

このような「文脈情報」があるために、(13a) は (13) のような語順になったのである。(13) に見る語順には文脈を背負ったある種の必然性がある、と言い換えてもよい。

以上を前提として (13a) から (13) を導出するには選択肢が 2 つある。生成文法主流派張りの「書き換え操作」を前提とする方式と「書き換え操作」に依拠しないひな形方式である。「文脈情報」が「文構築」に先行する ((13a')) ののである以上、前者が不合理であるのは明らかである。ここでは、ひな形方式の方を示す。とりわけ、(13a') の第 1 の新情報提示を実現するのに、文末に焦点たる「*in the production...sentences*」を始めから (= 書き換え操作による紆余曲折を経ずに) 配置して (cf. (1c)) 「文末焦点の原則」を遵守し、(13a') の第 2 の新情報提示を実現するのに、「FocusP」に「*Nowhere*」を始めから (= 書き換え操作による紆余曲折を経ずに) 配置している (cf. (1c)) 様子を読み取られたい。

⁽⁵⁾ いわゆる「偶然の穴 (accidental gap)」vs. 「体系の穴 (systematic gap)」の話である。

(13) a".



○ in the production and comprehension of sentences は「新情報」なので「文末焦点の原則」に則り文末に配置。
 ○ 加えて、Nowhere も「新情報」なので「FocusP」に配置。「新情報」を「FocusP」に配置すると「Is」と「主語」との間で「例置」が行われる。(正から始る。)
 → 新たな発話を処理する能力というのは、何と言っても文を産出したり理解したりするという領域で最も顕著となる/最も明白に現れる。

以上本節では (4c) の問題点を考察した。即ち、移動規則を始めとする書き換え規則の存在が ((4b) ほどではないものの当たり前のように) 前提されているデータを吟味検討し、この場合も移動規則は不要であり有害であることを、まずは英語に関して主張した。

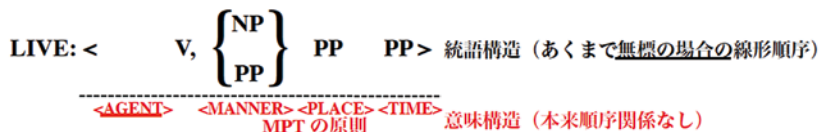
1.4. 移動規則は必要か (3) (cf. (4d))

本節では (4d) の問題点を考察する。即ち、移動規則の存在が (それ以外の手立てがそもそもあり得ないであろう、といった暗黙の前提の下) 前提されている日本語のデータ (=「かき混ぜ」) を吟味検討し、この場合もやはり移動規則は不要であり有害であることを主張する。

本節では、かき混ぜ現象に対する標準的な分析法、即ち書き換え規則を想定する立場に立つ先行研究を提示し、しかる後にひな形方式に基づく書き換え操作を想定しない分析法 (の原理) を提示することにする。

その前に、ヒントを与えてくれる取っかかりとして、まずは英語の事例を眺めてみよう。佐藤・小林 (2013: 151) は動詞「live」に関して次のように述べている。

(14) ひな形方式における「語彙部門」での記載は以下ようになる。ただし、ここでは厳密さを多少犠牲にして、「無標の場合の線形順序」の形で例示しておく。(なお、<AGENT> 以外の <MANNER> <PLACE> <TIME> は (無標の場合) この順で最低一つ具現する (MPT の原則)。ただし、「Taro and Jiro Live!」[(2.2 節)] などの場合はいずれも実現しない。)



この「live」の語彙記載項に関して、以下の2点について考察しよう。

- (15) a. 記述上の点。<MANNER> に関しては、NP (a happy life), PP (in a happy way/manner/fashion) の他に実は AP (happy) も可能である。また、AdvP (happily) は PP 代用表現と見做す。
- b. 理論に関わる点。「MPTの原則」=「無標の場合の線形順序」以外の場合をどう説明するか。つまり、この原則から外れる語順の場合のデータを書き換え規則を援用せずにどのような形で導出するか。

本論考の立場にとっては特に (15b) が重要である。なんとになれば、このことに成功しなければひな形方式自体が宙に浮き空中分解するという憂き目を見る結果となるからである。

この問題は一見すると難問に見える。というのも、いま直面している問題は基本的に「かき混ぜ」現象をどう説明するかという問題と同質の問題 (cf. (4d)) だからである。因みに佐藤・小林 (2013) もこの問題に正面から取り組んではない。理由は論文執筆時の時間的制約の中で、文の左周辺 (left periphery) の問題に焦点を絞ったからである。(そして、左周辺の問題に関しては確かに大きな成果を上げている。) しかし、左周辺の問題に関してうまくゆくのであれば、右周辺の問題に関してもうまくゆかない道理はない。要は「発想の転換」である。「コロンブスの卵」である。以下、この点を見てゆく。

この問題に対するひな形方式の側からの解答を提示するに際して、以下の2つの選択肢について検討してみよう。

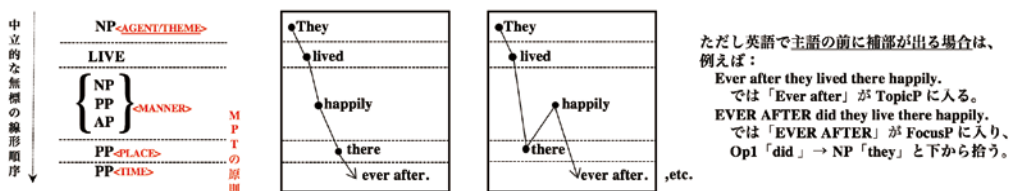
- (16) a. 無標の線形順序以外の場合は無標線形順序から派生されるものとして、書き換え規則を援用して説明する。
- b. 喩えるならば、「live」の取り得る項である NP<manner>, PP<manner>, AP<manner>, PP<place>, PP<time> という材料を机の引き出しの中に適当に並べておき、その時々が必要に応じて必要な順番で取り出して並べる。

(16a) の選択肢は、殆どの人が考える方式であろう (し、現に生成文法主流派の採る立場で

もある)。しかし、ひな形方式にとってはこの選択肢は「元の木阿弥」となる。では、(16b)はどうか。この場合は逆に、無標の場合の線形順序に関して説明が困難になる。救済策としては、各材料に無標順序に対応する番号を振るとか、無標順序に対応する種々の大きさの材料にする、などといった方策を採ればよい。

結論を述べるなら、ひな形方式の採る方策は(16b)に近い。ただし、このままでは芸がないので、もう一工夫欲しいところである。勘のいい御仁はもうお気づきであろう。そう、上で示唆したように、文の左周辺の場合に倣えばよいのである。左周辺の場合の方策は何であったか。然り。(線形順序を便宜上「左右」の次元で表すとすると)順序が一定しない要素に関しては(「左右」に関して中立的な)「上下」に並べればよいという発想である。これはまさに、(2)で「主語」と「操作語」とを上下に並べた発想である。そして(16b)に関して問題となった無標順序に関しては、有標度の違いに応じて「上から下に」に並べればよい、という訳である。つまり、いわゆる無標順序は上から下に順に拾って行く場合、ということになる。このように考えるなら、(16a)に必然的に伴う「書き換え操作」が基本的に不要となる。以上の知見を元に(14)を定式化し直せば、以下の(14')となる。(ただし、ブレースで括られた<MANNER>の要素は択一選択関係にあるため、要素間に線形順序はない。)

(14')



そして、例えば「素直に上から下へと拾ってゆく場合は無標のケースでコスト 0、1 段階上がる形で拾えばコスト 1、2 段階上がればコスト 2」といった具合に有標度を算出する仕組みも導入すればよいということになる。因みに、このことが含意するのは、言語表現の適格性は(語順に関しては)「適格か不適格かという単純な二分法」によってではなく「段階的適格度を算出可能な基準」によって測られるものであろうという点である。

ただし、ここで注意すべき点が一点ある。これは高橋(2016)でも指摘した点なのであるが、有標性は二段構えで考えねばならぬという点である。即ち、第 1 段階の有標性は文脈を考慮しない場合の中立的な有標性 ((14')の左の破線矢印参照)、第 2 段階の有標性は文脈を考慮した場合の有標性 という二段構えである。というのも、ある特定の文脈では情報構造等

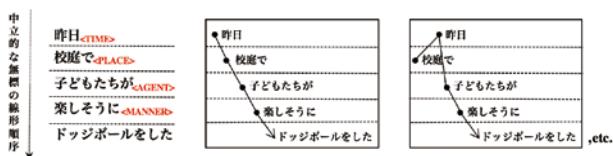
の兼ね合いで中立的な有標性に従うと却って有標度が高くなってしまふケースがあり得るからである。全体としてどのような形の有標性理論を想定しどのように有標度を算出してゆくかという問題は、従って、理論的な問題であると同時に経験的な（つまりデータとの兼ね合いで決まる）問題である、ということになる。（本論考は、この点に関しては緒についたばかりというのが実情である。）

さて、以上の英語のケースを参考に日本語のかき混ぜ現象を考察することにしよう。（17）を参照されたい。

- (17) a. 昨日校庭で子どもたちが楽しそうにドッジボールをした。
 b. 校庭で昨日子どもたちが楽しそうにドッジボールをした。
 c. 昨日校庭で楽しそうに子どもたちがドッジボールをした。
 d. 校庭で昨日楽しそうに子どもたちがドッジボールをした。
 e. 昨日子どもたちが校庭で楽しそうにドッジボールをした。
 etc.

まずは、作業仮説として（18）の左に示す中立無標線形順序を想定しよう。

(18)



ただしひな形方式ではいわゆる数量詞遊離現象に対しても「移動規則」は想定しない (cf. (1a)).

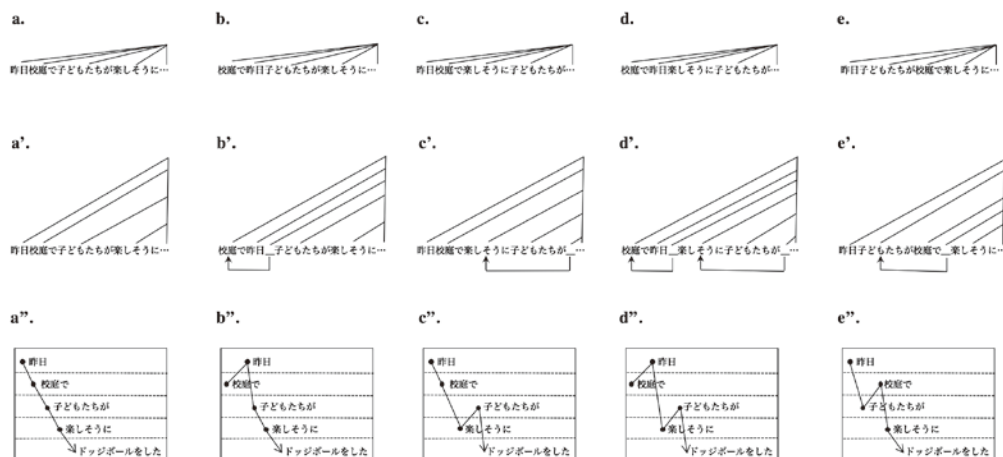
例えば:

- (i) 「10人の子どもたちが」 (翻訳調でやや座りが悪い)
 と
 (ii) 「子どもたち10人が」 (これで一かたまり)
 と
 (iii) 「子どもたちが (...) 10人」 (拾い方に依る cf. (20'a))
 とは初めから別物と見做す。

これには異論もあり得るであろう⁽⁶⁾が、ここでは作業仮説としてこれを採択した上で議論を進める。以下(17)に、3方式の分析を対照させて示す。上段が階層構造を考えない方式（これはさらに、移動規則を想定する方式と想定しない方式とに分かれる）、中段が生成文法流の階層構造と移動規則とを想定する方式、下段がひな形方式である。

⁽⁶⁾ cf. 高見・久野 (2006: 271 の註 4)

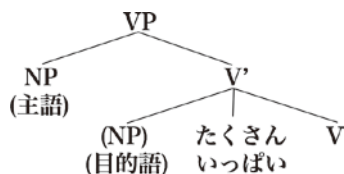
(17')



上段の方式は 1980 年代初頭まで想定された平板な構造である。動詞句を想定せず、自由語順を許容するのが特徴である。上述のように、論理的にさらに移動規則を想定する方式と想定しない方式とに分かれる (cf. Hinds (1973), 原田 (1977))。想定しない方式の方はひな形方式と相通ずるものがあるが、このままでは中立無標線形順序 (cf. (18)) をどう規定するかという問題が残る。また、代名詞の同一指示解釈を説明できない等の問題もあってやがて支持されなくなった。中段の方式は、その後支持されるようになり現在まで連綿と続いている、かき混ぜという移動操作 (付加) を想定する構造である。(因みに、右方移動を想定する諸論考 (e.g. 高見 (編) (1995)) もここに属する。) しかしながら、これまで論じてきたように、本来、移動操作という概念に依拠せずとも文法は構築可能であり、その方が経済性の基準に照らして多とされるという意味で、中段の移動方式は原理的に排除されることになる (高橋 (2016) の議論も参照)。下段の方式は本論考で想定するひな形方式である。中立無標線形順序 (18) の妥当性の検証と有標度の具体的算出方法の策定という課題を今後に残しはするものの、移動操作に依拠しない経済的な枠組という意味で原理的に支持される。

次に、「たくさん／いっぱい」といった「数量詞／副詞」を含む表現を考えよう。高見・久野 (2006: 153) は、「この現象は、純粋な統語論的現象ではなく、統語的要因と非統語的要因が相互に関連しあって決定づけられる現象であると結論づけられる」とし、影山 (1993)、岸本 (2003, 2005) の統語的分析を論破している。影山は「たくさん／いっぱい」は (19) で V' 内の要素 = 動詞 or 動詞の姉妹名詞句 (目的語) を修飾し、V' 内にはない主語等は修飾できない、とする。

(19)



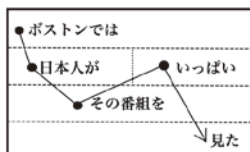
これに対し高見・久野は、(a) 他動詞の主語を修飾する場合、(b) 非能格動詞の主語を修飾する場合、(c) 非対格動詞が主語でなく動詞を修飾する場合、といった反例を示している。

- (20) a. ボストンでは日本人が、その番組をいっぱい見た。
 b. 子供達がプールにいっぱい／たくさん飛び込んだ。
 c. いっぱい 泣いた。

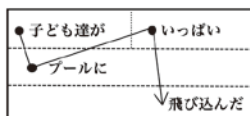
高見・久野の言う「統語的要因と非統語的要因」の具体的中身に関しては、高見・久野 (2006) に直接当たられたい。本論考では、その点もさることながら、(20a, b) のようにいわゆる「主語」⁽⁷⁾ と「た／くさん／いっぱい」とが離れているにもかかわらず関連付けられている事実を書き換え操作を援用せずはどう導くか、の方に一次的な関心がある。解答は以下の通りである。

(20')

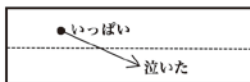
- a. ボストンでは日本人が、その番組をいっぱい見た。



- b. 子供達がプールにいっぱい／たくさん飛び込んだ。



- c. いっぱい 泣いた。



⁽⁷⁾ ただし、本論考では主語とは見ない (cf. (1h))。

ここでは、ご覧の通り書き換え操作が想定されていない点に注目されたい。

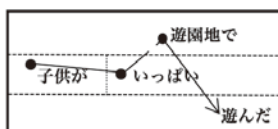
なお、高見・久野は第 5 章の註 8 で、以下のような例を挙げている。

- (21) a. [子供がいっぱい] _(ポーズ) 遊園地で遊んだ。
 b. 子供が、 _(ポーズ) [いっぱい遊園地で遊んだ]。

a では主語を修飾する数量詞的解釈が優勢で動詞を修飾する解釈は弱くなり、b ではその逆になる、としている。趣旨は了解できるのであるが、ここで解釈に関して「優勢」とか「強弱」とかという用語を用いるのは、実は誤解を招く。本来なら、話者の立場からすれば、a は数量詞的解釈のみ、b は副詞的解釈のみ、であり、それが言語運用の場面で聞き手が誤解する場合もある、という言い方が本当であろう。(もっとも、「解釈が」といった時点で聞き手のことを言っているのであろうが。) (21) はひな形方式では以下ようになる。

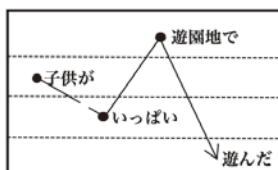
(21')

- a. [子供がいっぱい] _(ポーズ) 遊園地で遊んだ。



(「ポーズ」は連結選の中断で示す。)

- b. 子供が、 _(ポーズ) [いっぱい遊園地で遊んだ]。



(「ポーズ」は連結選の中断で示す。)

最後に、上に引用した「この現象は、純粋な統語論的現象ではなく、統語的要因と非統語的要因が相互に関連しあって決定づけられる現象であると結論づけられる」(高見・久野(2006: 153))に再度着目しておこう。というのは、(1c)でも触れたように、ひな形方式もこうした基本精神を共有するからである。なお、これに関連して、Vallduví (1993) が情報構造に関して生成文法主流派とは様相を異にする興味深い論考を提示しているということを指摘しておきたい。この論考の紹介と批判的検討に関しては、しかし、紙幅の関係で別の機会に譲らざるを得ない。

2. 結 語

以上本論考では、ひな形方式の（日本語）統語論に対する適用例として、日本語のかき混ぜ現象を採り上げ、この現象に対する書き換え規則不要論を展開した。骨子は、序節でも述べたように「語順の見かけ上の変更に対して書き換え操作を想定するのは誤謬である」という一点に尽きる。この点を（4）の各段階に分けた上で議論を展開するという形で示した。中立無標線形順序の妥当性検証と有標度の具体的算出方法の策定という課題を今後に残しはするものの、そもそも移動操作に依拠しない経済性を享受可能な枠組であるという意味で原理的に支持される方式であることを示した。

参 照 文 献

- Abney, Steven P. (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, The MIT.
- Chomsky, Noam (1995) *Minimalist Program*, The MIT Press.
- Culicover, Peter W. and Ray S. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press.
- 遠藤喜雄 (2014) 『日本語カートグラフィー序説』, ひつじ書房.
- 藤田和也 (2015) 「英日の翻訳における誤訳・不適切訳の背後に潜む原理の探究」
<<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- 原田信一 (1977) 「日本語に変形は必要だ」, 『月刊言語』 6, 大修館書店, 88-103.
- Hinds, John V. (1973) 'On the Status of VP Node in Japanese,' *Language Research* 9.
- Jackendoff, Ray S. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, The MIT Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2003) 「生成文法の視点から見た日本語」, 『日本語学』 22 : 10, 40-50.
——— (2005) 『統語構造と文法関係』, くろしお出版.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- 近藤安月子・姫野伴子 (2012) 『日本語文法の論点 43 —— 日本語らしさのナゾが氷解する ——』, 研究社.
- 真壁幸 (2012) 「「形式が同一であれば意味が同一である」の弱い解釈：英語の諸現象の統一説を求めて」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- 中島平三 (1995) 「主語からの外置 —— 統語論と語用論の棲み分け ——」, 高見健一 (編) (1995), 17-35.
- O'Grady, William, Michael Dobrovolsky and Francis Katamba (eds) (1996³) *Contemporary Linguistics : An Introduction*, Pearson Education Limited.
- 佐々木諒 (2016) 「「ひな形方式」を援用した英語の分裂文の分析」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- 佐藤大樹 (2012) 「「ひな形方式」を援用した英語の交替形の考察：子音素性階層構造を中心に」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- 佐藤怜美・小林維奈 (2013) 「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』 第 110 号, 東北学院大学, 107-178.

- (2005) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第142号, 東北学院大学, 53-75.
- (2016) 「生成文法? 認知文法? それとも…?」, 『東北学院大学論集』第172号, 東北学院大学, 75-93.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』, 大修館書店.
- 高見健一 (編) (1995) 『日英語の右方移動構文 —— その構造と機能 ——』, ひつじ書房.
- Vallduví, Eric (1993) *The Information Component*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.